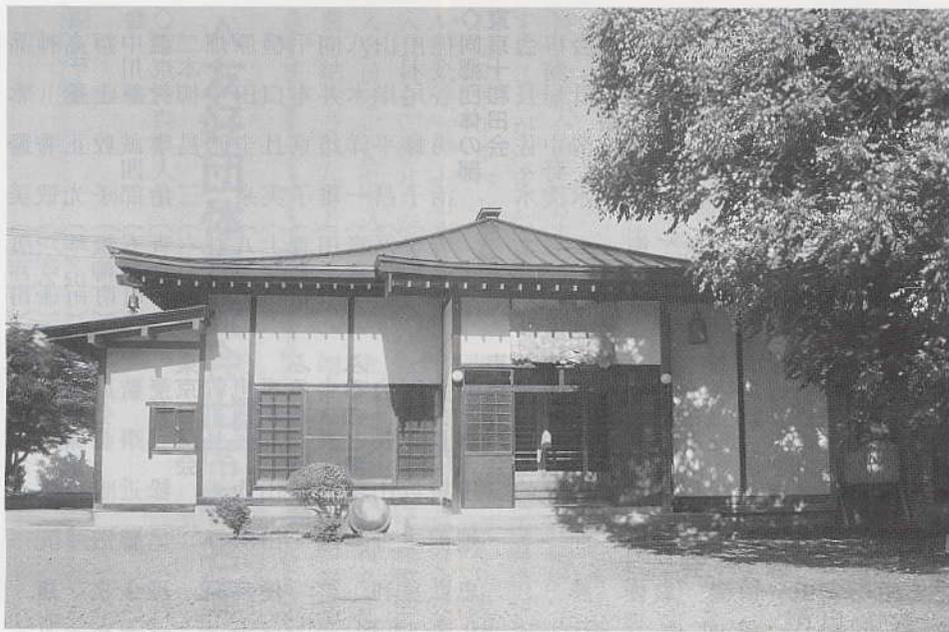


2005（平成17）年3月28日、相馬村は岩木町とともに弘前市と合併し、地区が広がっている。同地



覚応院外観。寺院脇の石段を登った先には不動堂が建っている。（2012年8月31日 蕨谷撮影）

区の北には湯口集落があり、南は秋田県境にかけて山々がそびえている。この湯口集落南端には小高い山があり、かつてそこに茶臼館と称される居館があったという。南北朝時代には南朝方の居館として利用されたといわれており、堀跡などと推定される遺構が残っている。

覚応院の本尊は波切不動尊と称される不動明王像である。弘前藩2代藩主津軽信枚の守護仏といわれ、1728（享保13）年8月、藩の家老喜多村政方によって寄進された。

喜多村氏は、政方の父政広の代から代々藩の家老をつとめてきた家柄である。そして、政方は、4代藩主津軽信政が師事していた儒学者で兵学者の山鹿素行の外孫にあたり、山鹿流兵学に精通し、詩文にも秀でていた。彼が覚応院に不動明王像を寄進した理由はわからない。この時、政方は藩の正史編さんに着手しており、領内各地の豪家、寺社などを巡見し、古文書や古記録などを収集していたことから、その過程で寺の存在を知り、興味を抱いたのかもしれない。

さて、茶臼館跡へ向かう山道の麓に、行峰山覚応院という寺院がある。現在は真言宗醍醐派に属する一方、江戸時代には修験道の寺院であった。草創時期は不明だが、1723（享保8）年7月に不動明王像が寄進された際の棟札が残されていることから、少なくともそれ以前に創建されたと考えられる。

1728年11月、覚応院は藩主の祈祷寺に命じられ、毎年1・5・9月に祈祷をおこなった。また、藩

から寺禄として米20俵を下賜され、1月8日には弘前城本丸御殿で藩主年頭挨拶に列座（御目見）する寺格を有することとなった。

祈祷場所は山頂、すなわち茶臼館主郭跡にあたる場所であり、ここに堂宇を建立して本尊を安置した。現在、ここには不動堂が建っており、役行者・二鬼像が安置されている。

祈祷寺に命じられたのち、寺は本尊を秘仏にして檀家に公開しなかった。しかし、檀家の希望もあってか、1732（享保17）年4月29日、本尊の開帳が行われた。以後、数年に一度、4月に開帳が行われ、多くの参拝者で賑わったという。

覚応院には、1859（安政6）年4月に喜多村氏から寄進された絵馬があり、本尊寄進以後も親交があったことを示唆している。政方からもたらされた一体の仏像が、覚応院の宗教活動を支えたといっても過言ではないだろう。

旧相馬村湯口の覚応院

蕨谷 大輔

（県民生活文化課
県史編さんグループ非常勤嘱託員）

いた儒学者で兵学者の山鹿素行の外孫にあたり、山鹿流兵学に精通し、詩文にも秀でていた。彼が覚応院に不動明王像を寄進した理由はわからない。この時、政方は藩の正史編さんに着手しており、領内各地の豪家、寺社などを巡見し、古文書や古記録などを収集していたことから、その過程で寺の存在を知り、興味を抱いたのかもしれない。